

相手の立場に立ってものを考えよ



創業者
本田宗一郎

その目に映っていたのは機械ではなく、人

ホンダを創業したエンジニア、本田宗一郎。生粋の技術者でありながら、その目で見据えていたのは機械ではなく、その向こうにいる「人」だった。

1981年、本田宗一郎は国や公共に積年の功労あるものに授与される瑞宝章の勲一等を受章している。品質の高い自動車やオートバイを世に送り出した「もの作り」の功績に送られた勲章。しかし、受賞に際し、従業員に対して宗一郎が語ったのは「自分と他人、あるいは相手」、つまり「人」についてだった。

「自分も満足し、相手をも幸福にするということがいかに大切であるか。いつも相手の立場に立ってものを考える。自分はこうしたいが、これは相手にどういう影響を与えらるようになるか、ということをしつかり判断することが大

切だ」

宗一郎は機械と向き合いながらも、その向こうには「人」がいることを、絶対に忘れなかった。自動車修理業を営んでいた若き日、「車を直すだけではダメ。車が故障したことで傷ついている乗り手の心まで修理しなければならぬ」という考えを持っていた。ホンダを創業したあとも、社員に対して「会社のために働くんじゃない。自分の幸せのために働くんだ。会社は社員一人ひとりが幸せになる手段なんだ」と語っている。

このように「人」あつてのもの作りを貫いた宗一郎の思想は、ホンダのものの作りの原点でもある。「モノを作り出していく過程は楽しい。自分の考えたものを完成させる喜びは、ものを作る人間にとって最高の価値があります。しかし、その喜びにひたる前に、

技術に関わる人は、その技術がほんとうに相手のためになるものであるかどうかを考えたいものだと思います。技術の進歩が、どこかにトラブルを生み出すということを避けなければならない」

国産車で初めてSRSエアバッグを採用するなど、自動車を利用する人の安全にも目を配ってきたホンダ。現在も、ミリ波レー

ダーと単眼カメラを搭載し、さまざまな先進安全機能を備えたホンダセンシングの搭載を推進するなど、安全に対する姿勢は変わらない。走行性能やスタイリングを追求するだけでなく、それに乗る人の立場になり、何よりもまずは安全性を確保するという考え方が根付いているからだ。

